

## 講演

## 国家の興亡と独創\*

川上正光\*\*

## はじめに

筆者はかつて次のようなことを書いたことがある。「歴史上一国が栄えたとき、そこには世界の先端を行くすぐれた大学があった」。とはクラーク・カーのことばである。この主旨に沿って筆者はわが国の高等教育が、質・量ともにおいっそう発展するよう切望するものである。しかし、このことは単に経済の発展のみを意味するものではない。

古代ギリシャが近代文明の発祥地であったといわれるような意味で、わが国が今後の世界文明の源泉でありたいと願うものである。すなわち、高遠な理想をもち、最高度の学問、技術、芸術を誇り、物心ともに豊かで、平和な New Utopia をこの我が国に建設したいと祈るものである。」(大学基準協会会報 No. 20)

さて、その後の我が国の発展は経済面ではあるレベルに達したとはいうものの、総体としては甚だ憂うべきものと考えざるを得ない。その最たるものは、「独創力の貧困にある」。「独創こそは国家興亡の鍵である」と信ずるからである。

以下、世界における日本の将来と国家の原動力である大学の使命についていささか考えてみたい。諸賢のご高評、ご教示を得られれば幸いである

## 1. 国家の興亡とその教訓

まず最初に独創力という観点から、世界の主な国々の興亡、盛衰を通覧してギリシャ、ローマがどうして勃興し、衰退したか。中世、文芸復興期はどういうものであったか。イギリスがどのようにして勃興し、衰えたか。これらについて感ずることを箇条書きにしてみると、大よそ次のとおりであろう。

- ① 国が興る時には、程度の差はあるが、必ずといってよいほど社会に活力がみなぎる。
- ② 活力だけでは新しい事態、新しい国造り、世代造

りは出来ない。その活力が独創を生む源泉となり、独創はまた活力を増大させる。

- ③ その活力と独創は、文化、政治、経済、宗教など各方面に顕在するが、各時代、各国によって独創的活力の主導力は多少異なる。
- ④ その時代なり世代の衰退は必ずといってよいほど独創力の枯渇化と一致する。
- ⑤ その意味で新しい時代の起爆力は独創的活力に左右される。つまり、緊張的使命観による独創力の断えざる展開こそ活力ある社会維持の核心となる。
- ⑥ 但し、独創的活力は偶然的、突発的のケースもあるが、常に歴史の中で蓄積されて、そのベース(即ち土壌)の上で開花する。その意味で独創的活力は不断の研究努力の蓄積の成果であって、模倣的な安易な姿勢の中からは生れない。

これを一言でいうならば「独創こそ国家興亡の鍵である」ということであると確信する。

## 2. 日本の将来～なぜ独創性が必要か～

以上述べたように国家は独創によって興り、その陳腐化によって衰退することを知った。他国より強力な武器を開発して、勝利を収めたということは、特に説明を要しない処であろう。(トインビーによれば、織田信長はその独創性において世界的に第一流であり、秀吉、家康はその足もとにも及ばないとしている。)

もう一つ重大なことは、個人間におけると同様に、民族間または国家間においても、相手に怨恨をうえつけては絶対にいけない。植民地政策がすべて失敗したこと、また資本による搾取も同様な結果を招いたことはその好例といわねばならない。

以上のことを念頭において、日本の将来は如何にあるべきかを考えてみたい。

- 1) 我が国は資源に乏しいのであるから大いに貿易を盛んならしめなければならない。特に付加価値の高い製品に重点をおかなければならない。こういう見地から、新規な製品の創造に努力し、また後述のと

\* 情報処理学会第18回全国大会特別講演(昭和52年10月3日)

\*\* 講演当時、東京工業大学学長。現在長岡技術科学大学学長。

おり、世界的に価値のある発明を重視し、技術貿易の振興を計るべきである。

- 2) 特に貿易の場合、相手国の産業を圧迫しないように配慮し、飽くまで共存共栄を宗としなければならない。
- 3) 以上のことを遂行するためにはすべての分野で独創力のある人材を輩出するようにしなければならない。政治・経済においても、工業界においても、はたまた学問・文化の方面においても、世界的に独創を発揮しなければならない。
- 4) 発展途上国に対しては、その国々の事情に応じて、技術援助或は教育の普及向上のための援助を積極的かつ有効的に行うべきものとする。

かくして、我々は世界の平和と人類の幸福に貢献し得て、我が国の繁栄を永続ならしめることができると確信する。

ところで、ここでもう一度我が国が独創性を必要とすることを強調しておこう。

- 1) これは次章で述べることであるが、世界の人々から日本人の独創性のないことを指摘され、馬鹿にされているのである。但しこれは消極的理由であろう。
- 2) 現在の日本は量産技術に支えられ、経済的にやや良好な状態にあるものの、これにアグラをかいていれば、何年か先にはどれ程苦境に落ちむか計り知れないのである。これを救うものは“独創”をにおいて外にないことを自覚しなければならない。
- 3) もう一つ、われわれは独創の喜びを味わうべきものと思う。世界で初めて発見した、世界で初めて作ったという独創の喜びは法悦にも似て、神から与えられた恩寵である。大いにこの恩寵である独創の喜びを味わおうではないか。これが積極的理由である。

### 3. 独創性からみた日本の現状

この間、ある会合で、ある学長さんからこんな話を伺った。「今度、ロンドンに行って、全く驚いた。目抜き通りのショウ・ウィンドウには日本の電気製品がずらりと並んでおり、テレビでは井上靖氏の小説がカラーで3時間も放送されていた。(音声は日本語だが、説明文は英語)これを日本製カラーテレビで見た英国人は、その鮮明な色彩を非常にほめていた。」ということであった。なんとうれしい話ではなからうか。

しかし、このことは生産技術がうまくいっているだけのことで、喜んでばかりはいられない。偶然ではあるが、ロンドンに研究員として行っている、私の大学

のT助教授からの手紙には次のようなことが書いてあった。

「こちらにいる日本の実業界の人々の話を総合しますと、“日本人は、要するに我々(英国人)が昔発明したものを一寸改良して売込んできているだけではないか”といているイギリス人(特に産業界の人々)が多いようで、未だ非文明人だとみられている面があるようです。」(中略)

「日本から画期的な思想や科学が余り生れていないのは事実なので、先生(筆者)のいわれるように、独創ということが今後の日本の大問題だとつくづく感じております。」(後略)

さて、ここで、日本人の独創性のなさについて、具体例を挙げて説明したい。

#### 1) 世界の研究成果の最高レベルを示すノーベル賞の受賞者が、わが国はきわめて少ない。

このノーベル賞については、アメリカの大学は極めて高い関心をもっているのでびっくりしたことがある。それは15年前、初めて在外研究員としてアメリカに行った時のことである。私が訪問した大学の多くは“我が大学にはノーベル賞受賞者が何人いる”ということから話が始まるのであった。Stanford大学では6人、California大学(Berkeley Campus)では13人、Columbia大学では(出入りを含めて)18人。つまりアメリカの一流大学というものは、ノーベル賞受賞者が数人いなければ話にならないという印象を強く受けた。

図-1(次頁参照)は各国のノーベル賞受賞者の累計数の比較を示すもので、この図から、各国の学術レベルの消長がうかがえる。特にこの図からわかるように、ノーベル賞に関してはわが国は未開発国並みであることはまことに残念である。

2) “技術貿易”が全く振わない。ここに技術貿易ということは工業所有権(特許と実用新案)についてのことで、(他国の特許を使用して支払う金額)に対して(自国の特許を使わせて得る収入金額)の比で表わされるものである。

表-1\*(次頁参照)は技術貿易額について、主要国間の比較を示すもので、アメリカが約10:1で群を抜いて大きく、次いで、フランス、イギリスが約1:1と並んでいる。西ドイツは0.37:1で我が国に近い。

次に、我が国の技術交流を件数でみると、昭和50年

\* 表1,2,3は「藤田不二男:昭和51年科学技術研究調査結果について(自然科学部門の概要),学術月報昭52-6」による。

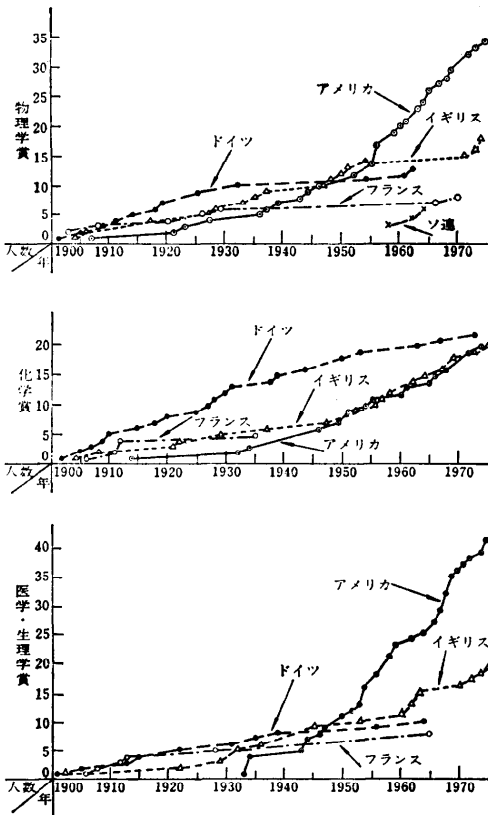


図-1 各国のノーベル賞受賞者数の比較

表-1 技術貿易額の国際比較

項目	受取額/支払額	受取額	支払額
国名・年度	%	百万ドル	百万ドル
日本 { 49年度	36	196	548
50年度	39	247	627
アメリカ 1974	950	3,805	399
イギリス 1973	105	341	326
フランス 1973	114	844	741
西ドイツ 1975	37	308	834

度については、技術輸出は2,811件で前年度より27%増加し、技術輸入は6,766件で前年度より16%増加している。

表-2 は主な産業別の昭和50年度の技術貿易額を示すもので、技術輸出では、化学工業が最も多く215億円、次いで鉄鋼業119億円、電気機械工業73億円の順であり、技術輸入では電気機械工業が382億円で最も多く、続いて輸送用機械工業357億円、化学工業269億円等の順になっている。このように内容は甚だ寒心にたえない。

表-3 は主な相手国別の技術貿易を示すもので、主な

表-2 我が国の主な産業別技術貿易額 (昭和50年度)

項目	受取額/支払額	受取額	支払額	
産業・相手国				
合計	39%	666億円	1,691億円	
主な産業別	繊維工業	59	13	22
	化学工業	80	215	265
	窯業	24	18	75
	鉄鋼業	195	119	61
	非鉄金属工業	14	5	35
	金属製品工業	33	6	18
	機械工業	19	45	230
	電気機械工業	35	73	382
	輸送用機械工業	18	63	357
精密機械工業	7	2	28	

表-3 我が国の主な相手国別技術貿易額 (昭和50年度)

項目	受取額/支払額	受取額	支払額
産業・相手国			
先進諸国	6%	69億円	1,067億円
アメリカ	4	5	116
イギリス	90	39	43
イタリア	10	1	10
オランダ	4	2	89
スイス	15	3	20
スウェーデン	4	9	212
西ドイツ	11	8	71
フランス		48	—
インドネシア		47	—
韓国		29	0
台湾		5	—
ビルマ		13	—
フィリピン		51	—
ブラジル		16	2
オーストラリア			

事項を拾ってみると次のとおりである。

我が国とアメリカの間が技術の輸出額も輸入額も一番多いが、その比が6%というのは心細い限りである。次に目立つのは我が国の技術輸出は先進諸国よりむしろ発展途上国に対する方が多いということで、これでは技術(特許)に関する限り、我が国は発展途上国並ということらしい。

原材料の乏しい我が国は、この技術貿易こそ、格段の進歩発展を計らなければならないことではなからうか。

3) 独創的研究成果の乏しい。その例として、OECD(経済協力開発機構)が昭和51年に、我が国の社会科学について調査した報告について述べておこう。この報告書の結論は、「日本の社会科学が知識借用型であり、抽象的概念操作を経験的事例研究よりも重視し、創造的な貢献に乏しい」としている。このことは昨年6月15日の各新聞にいっせいに発表された。

この結論は単に社会科学に限られたことではなく、

我が国學術の殆ど全分野についていうのではないかと思う。

4) その他、我が国の政治面、外交面についても、獨創性の欠如していることは、情ない限りであると思うのは筆者のみではなからう。

#### 4. 教育有害論

##### ～なぜ日本人に獨創性が乏しいのか～

日本人はどうして獨創力が乏しいのであろうか。ここでは、明治初年、わが国の近代化以後に焦点を当てて考えてみたい。

1) 官僚制度：明治初年、我が国が近代化をはかるにあたって、一番でっぴり早い方法は管理職を優先することだと考えたようである。その結果、日本の官僚機構が生れた。むだのない体制で近代化をはかるというねらいは、大変成功したと思う。人間にはほめられたいという願望がある。「長」になればほめられるんだということであれば、頭のよい人はみんな管理職になりたがる。その結果として、獨創性のほうには余力を入れないという現象が起こってしまったのではなからうか。

2) 西欧の學問の移入の仕方に問題があったのではなからうか。明治初年の近代化の一潮流として、西欧の學問を急速に移入し、これを消化することが進められた。この代表例として「トランク哲学」を取り上げてみよう。これはまず空のトランクを西欧にもって行き、そこでいっぱい哲学書をつめて帰国し、これらを翻訳しながら講義する。一通り終ると、また空のトランクをもって西欧に行って哲学書を買って来て翻訳しながら講義する。これが世に有名なトランク哲学の正体である。

このような自分で考えないで、他人の知識を借用するというか、受け売りするというかの方式は単に哲学に限らないのではなからうか。我が国の大学において、ほんとうに獨創的な講義というものが現在どれほど行われているのであろうか。その根拠として、我が国の學術書の多くは、総合報告的解説書が多く、獨創的なものが極めて少ないと思われるが、もしそうでなければ幸いである。

今年は東大100年である。日本においてどれほど獨創的な哲学が創られたのであろうか。「日本語で書かれた哲学書を読まなければ世界の哲学は語れない」という日はいつ来るのであろうか

3) 學問は人間がつくるのだということを教えていな

いではなからうか。とかく日本では學問は完成されているものだと教えているようである。すべての學問は不完全で、たえず人間が努力してつくり上げていくものだとすることを教えていかなければならないのではなからうか。

4) 伝統的に我が国では獨創的産物、特に知的産物に対して、正当な価値を認めない傾向が強い。例えば菓そのものには金を払うが、その処方箋には金を出したからなかったり、最近の例として電子計算機ソフトウェアの有償化が我が国ではなかなか受け入れられないという。また、日本人の研究成果が外国で認められてから我が国でも騒がれることはしばしば経験する処である。

5) 我が国では真の education (啓育)\* はほとんどない。education を「教育」と大誤訳し、教育にすり替えてしまったのは致命的失敗である。教育は teaching に該当し、教えることで、才能をひき出す educate とは完全に逆な操作である。したがって、我が国では教えるだけで、educate は一切していないといっても過言ではなさそうである。教えるということは、他人の頭を利用して考えさせることで、これでは自分で考える力の養成にはならない。さらに我が国の学校で行っていることをもう少し述べてみよう。

6) 我が国の学校では類題の解き屋を養成しているにすぎない。日本では同一パターンの教育を一生懸命している。このことは教育ばかりでなく、日本文化のすべてにおいて、パターンが同じになっている。よその国でつくられたいろいろの品物や考え方を、そのままのパターンで受け入れ、ある程度の発展はさせるけれども、全く違った新規のパターンをつくり出す能力は極めて乏しいといわざるを得ない。

どうしてそうなのか。そうであるのが当然で、新規のパターンを考え出すような訓練をいっさいしていない。日本の秀才は、与えられた類題を早く或はエレガントに解く人をいうとされている。これでは類題の解き屋に過ぎない。新しい問題を自ら見つけ、解くような力の養成は、幼稚園から大学院を出るまでの間、ほとんど行っていないのが現状である。こういうことでは、いつまでも新しいことを考え出す力が養成されないのはあたりまえであろう。学校においては、考え方の多様性を訓練し、自ら問題をつくること、また卒業

\* education に対する通語を探しているが、才能をひき出すという概念が中国および日本にないから言葉もないのは当然であろうという人がいる。しかし、全くないのは不便であるので一定啓育(心をひらく)としてはどうかと考えている。

研究のテーマは自ら考え出すようなしつけがまず必要であろう。

以上が教育 (teaching) だけでは独創性が育成されないとする筆者の教育有害論の骨子である。

### 5. 独創力を増強する方策はないか

M. トケイヤー氏の著書「日本には教育はない」をみると、「日本の教育は learn だけで study がない」ということを強調している。

ここで learn とは覚えることであり、学習することである。また study とは掘り下げて考え、物事の本質をよく理解することである。これをかりに考究としておこう。

このことと、筆者が先にのべた「日本には teaching だけで education がない」ということを組合せると表-4 のとおりとなるであろう。

表-4 Teaching-Learning 型と Education-Study 型の比較

パターン		I	II
志向型		知識の蓄積	創造力開発
学立 校の 場	操作	Teaching 教育	Education 啓育
	目的	教える	才能を引き出す
学立 生の 場	操作	Learning 学習	Study 考究
	目的	覚える	掘り下げて考える
特 徴	①	既成の枠内にいる	枠外に出て自由に考える
	②	物知りで模倣が上手	独創力が養える
	③	類題の解き屋に終る	発明・発見をする

パターン I は Teaching-Learning Type (以下 TL 型という) で、現在の教育体制はまさにこのとおりであると考える。すなわち、現在の日本の教育は物知りをつくり、これを賞賛するものであり、これを M. トケイヤー氏は「米を食う辞書づくり」\* ともいっている。そして、各段階のすべての入学試験は、どれだけ物知りであるかを計って選抜するものであるから、これは独創性のない者から順に選んでいることになると思口をいう者がいる始末である。

パターン II は Education-Study Type (以下 ES 型という) で、欧米はすべてこの型であると考えてよい。ところで、アメリカの大学の授業状況をみると、日本のそれとそう違わないではないかという人もいるであろうが、それについては筆者はこう答えるであらう。

\* このことはすでに福沢諭吉もいっている。

\*\* イギリスに留学している東京工大助手の肥後博士から「ロンドンで気がついたことだが、幼児のおもちが日本と全く違って、考えながら遊ぶように工夫してある」由。日本では考えるおもちが売れないとのこと。

う。

大学での授業を外から見ただけではそれほど違ってはいないだろう。しかし、幼稚園\*\*から高校までに、彼らは study をすっかり身につけていると思う。これについての裏付けは長くなるから省略する。

以上に関連して欧米には次のような格言があることを聞いたので紹介しておこう。

「A student is a lamp to be lit,  
and not a bottle to be filled.」

「学生は光を発すべきランプであって、  
燃料をためこむ壺ではないのだ。」

このことは、こんなことにもたとえられよう。

ここに池がある。その池の水は他から流れ込んだ水なのか、あるいは湧き水なのか、それが問題なのだ。

ところで、TL 型の日本の学校体制の中にあっても、人知れずこっそりと ES 型の努力をしている人もいるようである。このような人は学校での成績はそれ程よくなくても、実社会に出てから、大いに伸びているように思われる。このことは実業界ばかりではなく、学界にも存在することは興味あることである。

こういうわけであるから、今の日本で大切なことは学校制度に変更を加えるだけでなく、むしろ学校における訓練のやり方を teaching ばかりでなく education を加え、learning ばかりでなく study させることに重点を移すことが極めて大切であると信ずる。

さて、さきに 3. の冒頭に、日本は量産技術が大変うまくなったことを述べた。このことは、目的の品物を、品質よく、最も安く造るという類題を解いたことであって TL 型日本教育の工業面に現われた効果の終着点を意味すると考えられよう。これはこれで解けないよりはいいことに違いないが、これをよいことにして、世界の先進諸国の工業を圧迫するとなると、それこそ大変で、そのはね返りで、日本自体も衰退してしまいかも知れない。また、このままでは後進国から追い打ちをくわされるかも知れない。繊維産業はこの例であろう。したがって、量産技術にだけ頼ることはこの辺でやめて、われわれは新規な製品を独創しなければならぬことを、国を挙げて自覚すべき重大な時期にあると思うのである。

さて、本論に戻ろう。日本では learning の度合でできるとかできないとかいっているが、本当に重要なことはむしろ study する能力ではなからうか。これが独創に直接つながるものであるからである。しかし、不幸なことに study の能力を計るには問答 (dialogue)

によるほかに有効な方法がないようである。(Oxford 大学や Cambridge 大学では十分な問答による入試を行っている由である。)

とにかく、“模倣から独創へ”の転換が要望される我が国において、これを可能にするものは TL 型に ES 型を加えることであると堅く信ずるものである。

ここで、日本と英国を比較してみよう。英国はさきに述べたように個人主義が発達し、独創を重視し、模倣を卑しむ伝統をもつ。その結果、古くから幾多の画期的業績をあげており、このことは現在も決して衰えていない。その反面、模倣を卑しむこと、特有の社会組織などのために量産がうまくいかないようである。日本はこの英国と丁度反対の状態にあるように思われる。図-2 はこれらの関係を図示したものである。

以上を一言でいうならば英国は頭脳だけをよく働かしているが手足が動かない国であり、日本は他人の頭で考えていて、手足を上手にうごかしているように思われてならない\*。

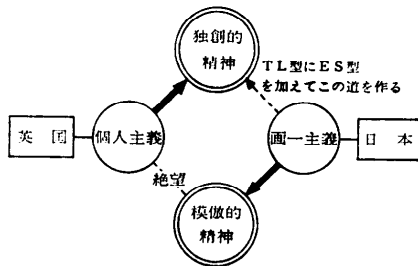


図-2 日本と英国との比較

最後に M. トケイヤー氏のことば(「日本人は死んだ」p. 135)を引用して本章の結びとしたい。

“もし教育制度が刺激的なものに改善されてくれば、日本人は潜在的能力をもっているのだから世界を動かす程の優秀な頭脳が数多く輩出されることは疑いのないことなのである。”

“私の信念によれば、このような優秀な日本民族の間からは、必ずや、独創的なアイデアが生れてくるはずであるし、天才的発見や現在の自然科学をはるかに越えた知的世界における革命は必ずや、日本人によって達成されるものであると確信している。

このような業績が日本人の間において遂行されるとしたら、それは日本のみならず、全世界のすべての人類に対する偉大な貢献といわざるをえないのである。”

\* なお、独創性開発に関心をもたれる方は拙著『工学と独創』共立出版発行をご覧いただきたい。

## 6. 大学の使命

今ここでこんな話を思い出した。それは大戦中に新聞に載っていたことで、アメリカの数学者が「地球上に日本という国が存在しようとしまいと、世界の数学は変わらない」といっているとのことだった。その意味は、日本人が創り出した数学の分野は皆無であるということである。これを読んで大変残念に思った記憶がある。このことは大戦後はどうなっているのだろうか。日本人が創案した数学の分野が出来たのだろうか。

ここではたまたま数学を取り上げたが、学問の各専門分野でどれだけ日本人が作り出した new field があるのであろうか。依然として、日本人は各分野で類題を相手にして、研究をしていると称しているのだろうか。これが実は大問題である。

さて、独創力の源泉である大学の使命は何か。その主なるものを述べてみたい。

1) 大学は世の木鐸として、社会を先導すべき使命をもつものである。

さて、実際はどうなっているのだろうか。われわれの工学部において、時々、時代の進歩に即応して〇〇学科を要求しようなどという。これでは大学は実社会に引張られているわけでまさに本末転倒であるといわざるを得ない。

また、世の中が病気になるときは、これを治療するのが大学であろう。しかるに、近年のオイルショックのときはどうであったか。ひそかに筆者は経済学部先生の御出ましを待望していたのに、何らの御託宣がなかったのはまことにさびしかった。

大学は象牙の塔といわれるとおり、俗界の些事には無関係であるべきだという人がいるかも知れない。しかし、われわれは誰の作った食物を食べ、誰の作った衣類を着ているのか。そう考えただけで、エリートである大学人は実社会と遊離すべきでなく、先導すべき責任と義務をもつべきものとする。

2) 大学は新しい知識を創り出す処である。いや、大学人は新知識を創造するものであるというべきかも知れない。

さて、この点はどうか。どれだけ日本の学者は世界の学界に貢献しているであろうか。貢献度の第一は新しい分野を創造することであろう。これはまさに、

“我より古をなす”(宋史 礼志)

ということと思う。自分が新分野を拓いて元祖となることである。

もし、さきに述べたトランク哲学流またはその亜流の大学人がいるならば、即刻心を入れかえて、“我より古をなす学派”に変心されるよう切望するものである。そして、独創の喜びを満喫することをおすすめしたい。

要するに、筆者は我が国の多くの大学からノーベル賞級の碩学が多数輩出することを念願するものである。

### 3) 大学は次代を担う人物を鍛練するところである。

講義、実験及び学術研究などを行うのはこのためであって、これらを通じて、教官の学識や見識が学生に伝わり、さらに魂が投入されるのである。これらのことが効果あるものであるためには、大学の教官は 2) で述べたように少なくとも新知識を独創した経験をもつものでなければならない。単に教科書を用いたり文献を渉猟して総合報告的な講義をするのであっては、その教官独自の精神が伝わらない。次の古人のことばを含まされたい。

“もっぱら知識・学問を事とする文字法師は、鸚鵡のように人びとに対して説くことはできる。しかしながら、人の心というものがない。”(栄西禅師、興禅護国論より)

ここで“人の心”といっているのは我々の場合、“学問を創り出す精神”といったらよいであろう。また、

“見、師と等しきときは師の半徳を減ず。

見、師より過ぎて、まさに伝授するに堪えたり。”

——瀧山禅師

これをわかり易くいうと次のようであろう。

“見解が師匠と同等ならば、師匠の半分の働きしかできない。更に、独創を加えてこそ、師匠の後を継げるというものだ。”

### 4) 大学は研究の結果を社会に還元する義務をもつ。

ここに研究とは新知識の創造をもって最たるものとすべきであろう。研究結果の発表、発明の公開等が必要である。

以上が大学の使命の主たるものと思う。これらの使命を十分果すために、Academic Freedom または Autonomy が公認されているわけである。

われわれは Academic Freedom を強く主張するとともに、大学の使命が完全に遂行されているかどうか、大いに反省しようではないか。

なお、独創の人間を輩出するためには、入口である入学試験をどうすべきか。このことは極めて重大な問題であるから、国家的見地に立って考えなければならぬと思う。

### おわりに

以上を要するに“独創こそは国家興亡の鍵である”ことを認識し、“どうしたらわれわれ日本人の独創力を強化することができるか”，ということである。これこそ日本の最大の問題と思うものである。

最後に、ここで世の中の一歩の困り者を考えてみたい。この頃よく知恵おくれの子供のことが話題になる。しかし、困り者はこういう子供よりは、知恵おくれの先生や知恵おくれの教授諸公、もっといけないのは筆者のような 60 代なかばで、本文のような世迷い言をくぐりだす老人であろう。

どうも書けば書く程、頭の悪さをさらけだすばかり。この辺で世界人類の平和と繁栄を祈りつつ筆をおこう。

お読み下さった諸賢のご高評、ご教示を切にお願いする次第である。

御清読多謝。

注) この小論は国立大学協会会報第 77 号の記事に一部変更を加えたものである。